

3. 17世紀の朝廷と幕府

2025.10. 2. 大橋 幸泰

はじめに

本日の対象／「2 近世前期の朝廷と文化」、「3 近世前期の政治と外交」

→17C前～中、幕府政治の基礎固めの時期／江戸時代の政治組織と対外関係の成立過程を扱う／本日は、その近世的特質について考える

1. 松澤克行「2近世前期の朝廷と文化」

(1) 近世前期の朝廷

朝廷・天皇の役割／①徳川将軍による支配の正当性を付与、②武家官位の叙任により武家の身分編成を補完、③国家と将軍の安泰祈願、④宗教者統制

→ただし、幕府の指導のもとに実行／五摂家・武家伝奏による間接的統制、京都所司代・禁裏附による直接的統制

→朝廷・天皇は、幕藩制国家に適合的な存在につくりかえられた結果、近世の国家的支配の一翼を担う／それを表したのが、禁中并公家中諸法度

(2) 近世前期の文化

公家衆法度／公家へ「家々之学問」を奨励／公家の役割として、家職の重視

→寛永期における天皇・公家の文化的営みが展開／寛永文化

2. 木村直樹「3近世前期の政治と外交」

(1) 政治構造の確立

17C 前、政治構造の課題／①大御所と将軍の二元政治の克服、②徳川一門の統制

→3代将軍家光まで、潜在的に将軍になり得る有力者を排除する過程

→4代将軍家綱のとき、幼少将軍を支える老中制(集団指導体制)が確立

17C 前、民政の転換／島原天草一揆(1637-38)と寛永の飢饉(1642-43)

→「なりたち百姓成立」が最重要課題

*領主の役割は「安民」を実現すること

(2) 限定された対外関係へ

全方位型外交の模索(家康)／①朝鮮・中国との関係改善、②貿易システムの掌握

→宗氏(対馬)による国書改竄により日朝関係の回復、東南アジアを含む朱印船貿易の展開、松前氏・宗氏・島津氏による対外関係の独占権承認

→キリシタン禁制優先による、限定的対外関係への転換(秀忠)／イギリスの撤退、スペインとの断交／ポルトガルとオランダの競争

→近世的対外関係の固定化(家光・家綱)／島原天草一揆後、ポルトガルとの断交／オランダ限定の対ヨーロッパ関係／ただし、幕府はスペイン・ポルトガルを追放した以外、関係を断つと宣言していない／これが後に「鎖国」と呼ばれる／家康の時代から「鎖国」が目指されたのではない

3. コメント

(1) 近世朝廷・天皇研究の戦後史

戦前・戦中、皇国史観の強固な枠組み／歴史学も荷担

→その反省から、戦後歴史学では朝廷・天皇研究への忌避感／近世の朝廷・天皇は無力であったとの観念から、近世朝廷・天皇を研究する意味はないとの認識

→1970年代以降、国家論への関心から、近世では幕藩制国家論の潮流のなかで朝廷・天皇の役割が問われた

(2) 近世の朝幕関係

近世「公儀」の構成要素／幕府のみでは成立しない／朝廷を含めて近世「公儀」ととらえるべき

→朝廷の役割は幕府を権威づける「金冠」／朝廷も幕府の援助に頼る／互いに互いの存在を必要とした

→幕府政治の矛盾の進行にともない、徐々に朝廷権威が浮上(→幕末、天皇を中軸に政治秩序の再編へ)／その背景に、公家(伝統的に家職を保持)による民間宗教者の統治が進行

吉田家・白川家：神職、土御門家：陰陽師、門跡寺院(聖護院・醍醐寺三宝院)：修験者

→村社会(村役人など指導者)における、朝廷権威を求める志向性

(3) 島原天草一揆の歴史的位置

島原天草一揆の原因／キリシタン禁制への反発、領主苛政への異義

→一揆後、近世期を通じて、キリシタンの脅威と領主苛政の不当さが印象づけられる(←→一揆前後の 17C 前～中、「太平記読み」の流行)

明君の典型：「太平記読み」の楠木正成、暗君の典型：一揆を引き起こした松倉重次・寺沢堅高

→対外政策とともに対内政策へも影響／近世秩序の根幹をなす

対外政策／ポルトガルを追放し、「鎖国」へ、対内政策／宗門改を制度化し、民衆統制を推進

→近世的「邪」(「切支丹」)を徹底的に排除することを基軸とした秩序を構築

* 異質なものとみなした対象(近世日本の場合は「切支丹」)を排除して成り立つ秩序／長続きせず

おわりに

近世の「公儀」／幕府と朝廷、両者の結合権力

→近世権力は完全な世俗権力といえるか？／①朝廷・天皇を構成要素として不可欠、②島原天草一揆を殲滅して安定を確保

【テキスト】

牧原成征編『日本史の現在 4 近世』(山川出版社、2024 年)

【参考文献】

高埜利彦『江戸幕府と朝廷』(山川出版社、2001 年)

山本博文『鎖国と海禁の時代』(校倉書房、1995 年)

大橋幸泰『検証 島原天草一揆』(吉川弘文館、2008 年)

【付記】

・明日までに、Hoppiiie にて講義記録の提出を求める。